

ACCU コミュニティ事例コンテストがきっかけに

# 黒川能初めてのパリ公演で観客を魅了

文：長谷川 正士（黒川能保存会事務局）

ACCU主催の無形文化遺産の優良事例コンテストで入賞したことがきっかけとなり、山形県鶴岡市の黒川能がパリで行われた「創造の芸術祭」に出演し、4月12日から14日までの間に4回の公演を行ないました。同行した同保存会の長谷川正士氏に報告していただきました。

## 500年の伝統

「黒川能」は、山形県鶴岡市の黒川地区に鎮座する春日神社の氏子たちによって守り伝えられてきた神事能です。

幕府の式楽としての洗練をへて、現在は鑑賞芸術として観客のために上演される、観世流、金剛流、宝生流、喜多流、金春流の五流のいずれにも属さず、重なりあいつつも、独特の形態を残しながら伝承されています。上座と下座に分かれて春日神社の氏子とそのまま能を舞う集団で、生活と芸術が深く融け合った形で、500年以上もの長きにわたって継承されています。



鬼女（シテ）と戦う平維茂（ワキ）

## ACCU のコンテストへの参加から

平成19年6月、鶴岡市を会場に、財団法人ユネスコ・アジア文化センターの主催で「無形文化遺産の保護とコミュニティの事例研究ワークショップ」が開催されました。そのおり、フランスの世界文化会館が平成20年3月から4月にかけて開催する第12回「創造の芸術祭」での出演を依頼されました。それに先立つこと4ヶ月、同年2月に無形文化遺産の優良事例コンテストがACCUの主催により行われ、黒川能（蠟燭能）が入賞6団体の一つとして選ばれたことがきっかけです。

「創造の芸術祭」とは1997年に始まり、フランスの人たちに世界各国の伝統的な

ものを見せることによって、他の国の人々の生活や文化、また、考え方を知らせることなどを目的とする芸術祭です。

500有余年の長い歴史をもつ黒川能、少しでも地元での演能の雰囲気近づけるため、舞台には春日神社の幕を張り、二本の一貫目蠟燭を左右に置くことで春日神社能舞台に近づけることにしました。演目は静かで恐ろしいものをという要望があり、美しい女性が鬼女に変身する「紅葉狩」が選ばれました。言葉の壁を乗り越え、神事である黒川能の独自の雰囲気を伝えたいとの上野由部・下座座長の願いがありました。

旅費の捻出や荷物の運送手続き等の幾つかの問題を克服し、出発前日にはパリ公演が無事に開催され旅路の安全を祈願するため、黒川春日神社でお払いを受け、出発当日は下座の先代座長である上野左京氏の霊前に参加者全員が集合、出発のご挨拶、お祝いの赤飯を一口づつ皆で分け無事を祈りました。

## 広がる感動と今後の文化の継承へ

芸術の都パリは過去の戦火で壊れては復元を繰り返し、フランス国民の伝統文化や古来からの建造物をそのまま残している都市でした。会場に着くと、能舞台となるステージは橋掛の長さは短いものの、黒いステージの表面に能舞台の形と大きさで板が張られ、能舞台を表現していました。更に持参した春日神社の掛け幕と一貫目蠟燭を左右に置いて黒川能独自の能舞台が完成しました。

2階席を含め390席の黒川能の一般公演向けチケットは早い段階で完売していて、最終日の昼間の学生向け公演にも、チケットが

取れない観客を入場させていたようです。ここでは能に造詣の深い大学教授ジャール・マルツェル氏が30分ほど黒川能の解説を入れ、その後の質疑応答では観客からは活発な質問があいつぎました。

会場は、異国の文化にも気軽に積極的に触れようとする多くのフランス人で埋め尽くされ、連日立見が出るほどの盛況でした。

すべての公演で、観客の集中力とマナーの良さに驚かされました。字幕がステージ両脇スクリーンに映し出されていたため、間狂言（前半の能と後半の能の間で行われる狂言）では笑いがおき、会場が一体となり能を楽しんでいるようでした。公演後、「衣装が美しい」「動きが美しい」「ほとんど動きが無い中ですべてを表現しており、素晴らしい」などの声が寄せられました。さらに、公演の合間には新聞社やテレビの取材も多数ありました。

今回のフランス公演には、これからの黒川能を担う世代も多く参加し、海外での舞台を通して自分たちが伝統芸能を未来へ、世界へ繋いで行くと言う意識を高めているようでした。今後の黒川能の継承・発展に大きく貢献することと思います。

（写真は筆者提供）



公演準備の打ち合わせをする下座座長（左から2人目）、主催者（同3人目）、上座座長（右端）